

ベリーショート賞

## 鮫の娘

山野辺せよ

ある日飲み会から帰る途中、道端で鮫から声をかけられた。声をかけるといふか、キュウキュウと鳴いて（？）私に擦り寄ってきたのだ。私は逃げようとしたが、後から後から付いてくる。仕方なく私は鮫と終電に乗り、六畳一間のアパートへ連れて帰ってきた。私が寝ようとすると一緒にベッドに潜り込もうとキュウキュウ鳴いた。ベッドを生臭くされてはたまらない（まあ、臭いなんてしなかったのだが）と思い、ソファーにタオルケットをひかせて寝かせた。その夜はずっとキュウキュウという夜鳴きが続いた。

次の日の鮫は、それこそ「鮫の恩返し」とばかりに散らかし放題の汚い部屋を、私が仕事に出かけている間にピカピカに磨き上げていた。私のそばにすりより、キュウキュウと鳴く。私は買ってきたコンビニ弁当を広げると、ハンバーグの三分の一とパセリをやった。鮫は嬉しそうに頭を私の胡座をかいた膝にのせてきた。

その次の日から鮫は料理も作って待っていた。近頃の鮫は料

理もできるのかと考えながら、手作り感あふれるハンバーグを口にした。

「美味しい」

と頭をなでると、鮫はやはり膝に来た。

何気なく付けたテレビに海が写っていた。鮫はテレビを見てキュウキュウ鳴いた。そういえば鮫は海にいたのだったと思っていたが、私が席を外した瞬間に水音がしなくなった。覗くと悲しそうに尾ひれを揺らしている。私は鮫を抱き上げると、ソファーで一緒に寄り添って寝た。最初は鳴いていたが、腕枕をすると落ち着いた。鮫の体は思っていたよりも小さく、そして細かった。

「暖かいな」

私は言葉にした瞬間にそれを恥じた。鮫は変温動物なのだから、暖かはずなどないのだと。

鮫を抱いて寝た日、夢をみた。私はただの漁師だったが、天女と恋をしていた。この世で一緒になれぬなら、仏の慈悲を頼

って二人来世で一緒になろうじゃないかと、互いの手首を赤い紐でくりつけ、冬の海に入ってしまった。けれど、気がつくとは私は浜に打ち上げられていたらしく、親戚の家の板の間に寝かされていた。村人たちは口々に私の無事を祝った。というのも私の隣には人食い鮫が打ち上げられていたらしい。私も見に行くと、鮫の周りには人だかりが出来ていた。人の合間から覗くと鮫の歯の隙間には赤い紐が見えた。

「うわああああああ」

私は夢中で鮫の口を開いた。しかし彼女はいない。次に腹をかっさばいた。しかし彼女はいない。人々は私を気が狂ったのだと思った。私はその後嫁もめとらず独りで生きて鮫を獲り続け、そして死んだ。そんな夢だった。

朝目が覚めると、鮫はすでに横になく、台所から物音がした。朝食を作っているようだ。私は台所の鮫に、

「これは罪滅ぼしなのか」

と聞いた。すると鮫は台所から戻ってきてキュウキュウ鳴いた。

「何が言いたい」

鮫は私に近づいて、私の手首に片方のヒレを寄せた。その時、確かに鮫は天女の姿に見えた。しかし次の瞬間には、いつも通りの鮫の姿で私の膝に落ち着いていた。

「赤い紐が切れてしまったから、私が入で、お前は鮫なのだろうか」

鮫は特に何も言わず（鳴かず）、私の脇腹に頭を摺り寄せていた。私はザラザラした頭を撫でながら、額に軽く口づけた。人間の皮膚の柔らかさだった。

その日部屋に帰ってくると、もう鮫はいなかった。むしろ最初から鮫などいなかったのだ。

「おかえり」

私の声に答えて、仮住まいである六畳一間のアパートに明るい女の音がする。

「ただいま」

彼女は三年前に結婚した私の妻で、三ヶ月前出産のために実家へ帰っていたのが、今日戻ってきたのだ。

「ほーらパパですよー」

そう言って差し出されたのは、生まれたばかりの我が娘。

その娘が、

「大きくなったらパパのお嫁さんになる」

とか

「ハンバーグ作ってあげる」

とか言うようになるのは、その数年後の話。

膝の上に頭をのせてくる七つになった娘に、あの日の夢を昔話のように聞かせると、

「天女は漁師さんが死ぬのがやっぱ悲しくて、来世で結ばれなくても救いたくて、鮫になったんだよ」

とやけに大人びたことを言う。「何で鮫なの?」と返せば、  
「鮫じゃないと、結んであった紐が食いちぎれなくて、救けら  
れないからだよ」

と、怒る。そして天女のように美しい私の娘は、まるで愛しあ  
う方法を知っている女のように、私の頬にキスをするのだ。

「パパ、ほっぺにチュ」

という、可愛らしい言葉と共に。